

一一三

古今

藥

本草

卷

五  
六









之を不與しゆすて中計ひ殺らる。たのむは体も終身よりあつて我  
も又母に帰るとして兩夜の計ひかり候も。依て棄てて君びがうと。かこ  
りておのを添ふあぐら。白粉懐し小そくを合撲と押のりて冷み笑よ  
こ一お。おのりき屋の番英雄の魂あんとは。傳安紅き構りらる。妓女  
よの托べき主をぬ。韓鄆王を卒伍の中よ多くみわびし。梁主人の  
たきし。眼慧といふかね。我軍は多くふあは多く其堺よあうに  
た温柔混沌人をたて終身の偶と。懸敷を考せ殿をたると  
怪はぬ。婢女の古訓なう候も。東川舟の浪花を安免下。末世の放笠  
と希ふのともや。庶几父子の義令。妾他村よぬして身と托するあわ  
び。果て始は情よ度り候れ。止家実よ。後乃策なる。深も魚(濃)う  
澄しゆれぬと。人の涼より清しゆれやと。いざらばいざれよ。いとら  
ひを應承て。此後をたてり。ゆる。但し其を刀鞍と。ぬれよ小

○英州帝後編卷之五下

かさめりて後。此身別人の許し候へ。かきし。其人の欺あてなる候も。  
い今日より君と房とをうら。ゆのふ陰んで別を死とあうせん。とてうま  
うれりげむ。其日より君の家。うらり人一面で。白日も煙を  
張下て。机より流筆を拜写し。圖を考る。ふらう。いなる。小女のうけひ  
さる。う。若て快く。来とらう。えといふ。為守中。た。紫は。旅宿よ。ゆて  
かとも。れと。きこ。常人の。言。い。あ。と。と。な。ど。は。ど。彼。を。刀。馬。鞍。衣。旅。の  
れ。い。多。く。落。し。と。金。を。と。り。紫。は。中。よ。笑。て。ふ。や。と。あ。れ。人。と。い。ふ。は。ど。り。  
早。進。為。り。て。と。時。の。よ。奴。僕。よ。奴。あ。は。く。て。津。の。國。へ。や。り。ぬ。日。日。ら。り  
の後。其。物。皆。さ。り。た。ら。り。と。な。り。す。ゆ。為。守。中。と。小。る。帝。よ。を。實。の  
來。せ。り。と。い。ふ。小。る。帝。室。の。か。ら。り。其。物。謂。ら。り。と。か。つ。つ。白。妙。け。時。と。と。其  
写。し。て。壁。前。品。よ。う。り。不。覺。不。知。不。察。不。怖。の。句。よ。あ。ら。り。と。尊。と。圖。き。迷  
へ。は。花。を。考。ひ。候。は。は。は。毒。を。ね。る。み。字。の。照。る。八。方。れ。字。よ。準。人。若。み



めんぞ金船を期見と机上は留めぬ外面のありと女をうらひたるにお  
 守へ手胸のびよおあつてふれ使どもうりく小ち席の面も返びく  
 白妙が出る成て介の言ひなきてつげば我もけあふ一日もひさうあゆ  
 や同一日ふぬぬを候えんと躍り走りて船の役けを紫の江にまき髪  
 ぢぬるお女とねば即日船を出るべきを。明日のれども又ふとをふた  
 もお女と船へ送らねよといふる白妙其の疾とあて煙とては梳洗して  
 今日こそ此一生と托とるんぞ死せられたるぞと。脂粉香深くちと  
 用て化粧の芳芳人とおひ。光緒のうとては天竺のてく小ち席が紫船  
 うまうと空て小ち席の先がらて船にゆる。紫の船に其のあふよてお  
 歩と隔てはるにうらみおふる席後までは涙はあり。おふるの紫の船に  
 つらふち席の我船にありて白妙の顔を向うて宵わらるるの内へはる  
 らん。おひきまの心をあつるおのり時のもくんとは。眞嬉り情衰へ義折け







恩徳を以てしては終末初より入るる世の中より今も是れを奉  
 じて故人の匱具を送りて又それと信じて謝物を以てせんといふ白  
 妙身造なる描金投厨を指てまゝに調なけ給なりと僕も途て  
 障の衣より送るまむ。紫のまゝに彼を刀鞘より小布巾が時昔れ小袖  
 まど櫃のより無よりとやひ盛てかろふあるふる布より我を寶に終ま  
 るし。やがて女が身れ人の去書と我替てり。白妙もんそある調な  
 るまども。遠いどやあましく小布巾と云ふまじ。彼は只てまきくても  
 ぬ。白妙船燈より出て来はが船をまよき。やがて其船へあるまき。今ま  
 るる箱の中より小布巾の護身の香囊あり。あれと度一度はよ間  
 物置くころ入るといふ。紫のときはよりまろん。白妙が髪。簾昔に減せ給  
 愛敬はまろんにあざりて何りたあらん。是者も命にて箱をかろる。  
 白妙濡とぬき一團は内より抽替わり。先第一層を抽出し。内より冊より







もどき若其人かゝる。たわのりて下す世のやとさきゆめらんや。今小を  
尾志空守。情の方より下けやとく。何と云くもねりげなきこととら  
てもかたやうらめしけれ。里の姉妹の贈物と假しねども。是こそと手  
本願の諸君。都鄙の客商の恵と増れる百寶。も情人と終身は生活  
こがへかゝれ設けられも。今こちて用ありある。我箱の中ふまわれも  
情人の眼中に珠あり。是皆妾が運命の展ざる所。妾をそふ烟に死と  
てい僕が春鳥を送り彩と還るの会なり。あまのいへ命もたへんと  
さひー初創よかりと。妾は腹よをいふ所願して妾よとむらり。衆人れる  
小を布蓋入つて涙と流し。白妙はじひ道を謝せん。白妙は梅姫  
ては時よりて一旦彼船へあを多くさやけ。寶匣と抱きて船に  
たよ。さへ其船へあんと涙さるる白妙は跳入り。船中多く船に  
とする。白妙滾て影もかり。心よ是と

○英洲帝後編卷之五下

盛粧躍海目無淚

去處俠魂伍綠珠

けやいへき。傍人皆身をうとて小を命と笑ひのさる。宋は海城と  
言わし。らんをうた。東に船と出し其西は去す。南海よりんこと  
は風定す。大海の沖に船がりする所よ。妾は海城宋に抱き  
倉の家使國人と役して船と陸に取らみ。今れ女が抱かへる  
艦頭は白妙のうらむ船と痛てこせ中。業江とて多一人は孫  
ど綁きて去す。白妙は小を命に船中よりて入る。船中よりて  
下ぐきり。情をさへ。女が涙情をさへ。さるるは縁会り。白妙は  
浮花の身れらん。我も若く手の浮氣放蕩。彼は狭小死し。我は  
我が僕より家ちりて。悲し我をさるる。今こち。適世をさへ。は  
人は笑ひ。まゝ父の不興を控て家より。さるると。石刀刀万。詞を  
を出し。時のさゆふらり。とさゆふらん。さるる。小を命が。白妙は



孫は正方も何とやんば冬の年の衰をえて老の故に馬騷も嗜ま  
戀のふらに孔子倒へ。男うあききとて。一旦のいづる解家のこ上國  
の人よかりて俗情を疏くぬを恨びやぐと家務をゆづり司成かじむ  
板岸の熱官成徳へふる命が其後信りかたといふとふ人。我  
國のゆるの期きりて大板岸にねにゆりしるん。さう派の少刀とあ  
落しうぶおかりたも家の侍。あけてゆさせす漢人とやひ揚せ  
りはよ。さう派の介よこの箱と取あげ。是俱よけ旅の落せおかりし  
あいてうげしう。成徳いするると開らきんば。皆夜光珠のたうて  
一角魚騰鳥塚龍珠とふ瓜あす不勞を價珍寶たう。彼漢人衣裳  
美の酒を酔て。成つらふ赤い額にた。其松女の動儀し我のいの白ゆ  
として。ちちゆが始終を逐ざるこ業にが悪をさうら。ひし我ふちゆ成乃  
をさうてふす今依ボりゆらる。君まらま情依さうて速し其故て

○英州帝后後編卷之五下

そらへて事成就やえしう。げ息と謝せんあいま漁人よ托して百寶と  
致と。軒美意と酬ゆとゆらてわい詞つる女の格伴わく他事とる人。醉言  
一乃の成徳白妙が靈力とて成て寶貨をうけぬ。水陸を設け供養  
して幽魂を慰りら。痴たうされ情よわらたれば使よあどとけ。情を  
を致欠とるのしん。あ人う身よりあまら。世の風月よせよのい二篇を  
看破て情のある不真のさゆらふを知らん人の笑ひを羨ね戒もあはし

⑨ 宇佐養宇津宮世祀を飾て敵を討話

南朝中勢親王の沖子兵部卿尹良親王の遠州とて所誕生あり。後  
吉野へあつちひて元中三年大將軍を賜り。應永四年新田原田桃井  
其介の宮方相談して上野國に遣へり。岡本山川十一家の令供奉し。  
後河國富士ヶ谷田次郎が籠り入せられ。よて宇津の親王と呼ばる。  
け田次郎女子の新田義助の妻にかりし。其奴とよらる人。富士十二



郷の諸士服屋敷の奮ぬとねとて味方より守護しなる。同入来甲州  
武田右馬助館に入らせむ。をけり上州寺尾の城に移りて其間合戦  
度りておふ。同三十年寺尾は信子良王を疎し。信濃國守  
伊六郎の城より。其翌年冬河國是助に後らせむ。中並合の  
大河原にて飯田を。駒場次。二百餘騎と侍請ふとふして一  
なる宮方命とて我ひ飯田駒場とおられける。味方より飯田羽川  
谷と始めお入討死して士卒も散く。上州より宮のしめり  
とて在る家へ。やむ火を放ては生害あり。其後の良王と寺尾  
は信濃堅まうて根井が落合の城に移りて。其折信尾州津島と  
橋保某の伊良王の姻属カレ。け方へ。やむ。各お致  
して乃の便宜を。み甲斐信濃を。恐む。ふ。は。け。飯田  
が。旅。を。討。れ。る。駒。場。三。郎。供。養。の。軍。と。多。勢。と。と。う。て。襲。身

○英州南後編卷之五下

ふ。根井貞綱ふと。は。討。死。し。る。良王其ひまふ。信のび。ひ  
笛吹。と。と。さ。や。む。び。而。て。敗。卒。等。追。は。き。又。追。と。は。加。勢。と  
して。ある。人。殺。あ。り。て。二。百。斗。し。か。り。ぬ。の。り。津。島。大。橋。氏。より。出。陣  
して。常。川。信。矩。二。百。の。人。殺。し。て。其。り。合。せ。ら。れ。は。味。方。も。生。出。る  
か。地。と。是。を。ま。て。駒。場。飯。田。も。上。林。今。川。と。若。て。加。勢。を。と。ひ。を。通  
信。を。ま。ち。軍。と。圍。て。た。め。く。ひ。ら。る。上。林。今。川。も。あ。ま。き。の。風。は。宮  
方。は。早。く。回。道。より。津。島。に。立。城。し。と。人。の。と。多。ろ。し。津。宮。若。綱  
衆。人。と。し。ひ。て。し。や。ぬ。ぬ。し。や。ぬ。お。つ。き。を。ま。の。ひ。よ。れ。ぬ。出。來。て  
先。公。の。仲。親。は。来。橋。と。れ。し。原。田。根。井。忠。死。あり。新。田。義。則。入。道  
は。捕。ま。れ。玉。に。味。方。の。大。事。は。時。不。迫。り。あり。あ。る。は。是。を。合。戦  
の。や。と。ら。る。れ。た。れ。間。の。の。り。く。と。の。と。て。敵。を。お。び。た。理。を  
た。ら。ず。殘。念。の。し。ふ。ね。な。り。今。日。此。所。と。逃。は。と。て。津。島。より。出。陣



軍を之あるより。乃のあてども敵むる石れ卵を塵むいせり。之を  
責りて。合カ一も入格敵を扱けり。其末の候一も入格也。而  
是(お)さ。其射戦どしとせしむき。斯紅先もく。支を力のふり  
て。此方よりおひりては。は。い。ま。く。り。て。傷き負をさる。あなり。  
今及の君代所追ひのふ。休奉。先へ。い。し。あ。せ。び。面。く。ま。り。近  
き。石。原。を。慕。て。勢。を。り。後。回。駒。場。う。居。あ。攻。ま。る。て。を。追。う。れ。其。ひ  
事。へ。候。う。ま。あ。待。う。け。後。は。あ。り。十。分。の。勝。を。た。ど。も。五。格。に。戦。ひ  
け。べ。え。敵。の。氣。を。折。く。べ。至。合。の。軍。の。味。方。は。戦。志。た。く。敵。軍。四  
の。地。は。不。意。と。お。て。我。軍。と。若。め。り。わ。り。即。ち。其。命。を。戦。ひ。に。使。つ。て  
た。の。て。は。十。二。の。勝。べ。し。十。二。の。五。格。の。軍。で。ん。と。う。た。り。諸。君。も。其。意  
願。と。い。何。も。も。軍。様。は。列。々。歴。々。な。り。皆。を。因。り。ま。す。今  
川。乃。勢。弱。場。と。助。う。り。と。い。ふ。は。い。は。し。て。防。ぐ。と。云。字。依。る。在。る。矣。















つた。宇佐兵衛は後より吹原にたどり味方の志をさしめて。善かば風は  
背に障くとどし。石壁の下に風をよぎせしむととどろきととどろきととどろきと  
つらねつて風をけしきをとて。さうり味方の陣やうり  
は。風をたかして敵りくをまはり。根を無き火をさし  
たりはら火をあんはひりうり敵のたれ焼く。時宇佐兵衛下知て橋を  
たれまはりとうりて喊とどろし。今川方火を製成し  
めけども。大おお罪てあし。敵の焼あふせんと。敵と人逃ん  
け陣をら破べ。出て敵をしる合戦せし衆とけはし。先とと  
後とつれとを火とせし。敵はしひりうり。喊のさすへし。うり  
敵を人し。さし。遠し。敵のしり。把火のひりうり。敵を  
し。うり。退あし。大木と門のけ踏ん。人ねと今川  
め。の。後。地。と。敵。の。う。ら。ぬ。い。延。治。は。け。方。う。り。め。か。す。ま。退。り。用。ん

○英州帝後編卷之五十一

して進び。一町をうり。吹原の風諸勢の眼に入りて。痛さか  
かく眼を開き。面をれ。又あて。痛を喚て。進ぬ。さし。法  
兵が勢。方より出て。究竟の歩武者。切夫を。うり。切て。切て。切て。切  
号を定て。働け。今川勢。むり。さし。き。び。き。敵の。風。揚。毒。乃  
計を用い。一先。門。や。大。お。先。よ。立。て。門。後。よ。士。卒。踏。と。ま。り。う。り。め。か。す。ま。退。り。用。ん  
く。敵。く。小。仕。つ。け。られ。敵。の。め。も。多。う。れ。ぬ。宇。佐。兵。衛。と。小。さ。き。お  
この。た。後。在。る。柴。を。焼。む。げ。た。れ。を。白。登。の。と。く。險。及。を。て。う。り。  
士卒を指揮して斬て。落し。敵も。と。う。り。ま。ま。う。り。て。強。と。れ。り  
せ。る。敵。六。十。餘。人。と。斬。れ。て。う。り。一。石。の。角。の。柳。柳。番。番。の。た。價  
と。あ。め。て。賣。り。う。り。と。ど。り。と。大。笑。う。り。凱。陣。し。る。さ。し。宇。佐。兵。衛。宮。を。細。  
良。玉。を。大。門。の。前。の。間。に。う。り。漢。語。と。と。あ。ま。り。今。川。を。安。し。と。二。百  
人と。二。よ。よ。分。ち。一。枝。の。柳。柳。右。馬。亮。七。十。騎。と。と。さ。し。宇。佐。兵。衛。が。陣。と。助



よりして西少の明神の森に依り居る。石網百三十餘と云くは  
ては配言合よりなり。敵同成見て向を押しける。約切が勢は百  
人多甲州よりありは西上士卒をやとりて敵の旗をさぐる。官方さ  
のへぬりて今川かえのるよりして老人まで肩をうへひふふ乃  
ころ。勢と申すは此の旗頭をアそいふも身の進退と定人とす  
其人較いまは百身ふと下とと告るなり。あまむざんや。今川の大勢  
二百身の人なりとて一つけ合さるべき。のころやれども一せしり  
はとてと。とどふ其亦成多せんところ。耐よとらよりとつとあつて百  
餘の兵押しける。約切はあまはあひよりし守城をぬらけられ。あ  
は只切よりす。二町身近き山の尾を後にあそ備を定りんとす。あま  
の森より桃井が伏せり。民家の入り身を覆ひておいた。しく敵を  
げし。敵かごり大勢を冬とにむひがけず。約切が人数をわたりて  
○英州帝後編卷之五下  
十三

石網桃井備を合せて押しける。日ひあそ。約切へ大辻の小堂を楯に  
て陣し。五家ををくから築き焼てゆへんせす。石網桃井と敵隊とつて  
其夜いまだあそ。宇佐兵が勝とけり。一軍を陣の残ひをりけり。  
すかた者へは強強と一隊とをばせてゆへんと押し。勝馬八十餘と率  
たは地はけ。驥子にほきを率て敵の後をさぐる。とどりける。約切  
隊は今川敗軍の告げきて力と疲し。敵つめぬり。とて引ては。相  
の士よりて。向の切をす。のあそ。敵隊の平地に伏せあり。しに敵は  
敵の旗ぬり。力をさく。斬腹よ。は四せん。とて。却て人。を。は。は。は。  
き。と。士。卒。を。く。げ。し。用。か。し。は。不。下。よ。成。さ。る。は。は。は。は。は。  
速の勢を巻て。今。勝。と。寒。し。と。あ。る。は。約。切。が。一。軍。を。免。群。免。し。是。り。ん。と。  
して市より出れば。搏き。魚。群。魚。と。異。り。ん。と。す。洋。よ。れ。ば。勢。は。身。の。後。に。  
らぬ者。との。巡。是。て。と。り。り。ら。ぬ。官。軍。の。勇。士。を。の。這。つ。て。後。と。と。







予ふ箒痕をほけ。或い砂をたじきどして人仕あつてむく用を  
とるる。或加ふ。この方ちく險きん流て引せたる柵の隙人のとる  
あるわくある。あましみそひてをせ付りふ。又日十月の間必どしをこ箒  
同小豆印あり。されば城中之款のたアをわと。づれらののとりとあやと  
案どる。をたわらう款とかるべき。早屋のむら崎の扱ひ佐倉の基瓦之  
空あそとねを窺ふて入らる竊候なりんとをほけ。一日諸家と集て評  
議して云。番豆崎何某佐倉と早尾と同日に責べき。よほひわら。あ  
取より加勢と。とすも必をゆひ入むるやうかく。く。味方はあ  
かへのまづひとる。あねか。ま。其條に。か。ひある。ゆ。く。と。く。を。く。ら  
く。扱。處。に。か。よ。う。く。ふ。今。日。の。白。の。間。小。あ。る。べ。し。彼。若。南。我。ち。上。油。の。さ。せ  
て。い。方。へ。た。く。け。る。の。し。と。あ。り。ご。し。士。卒。の。面。く。其。を。ら。何。ん。と。し。と。内。と。と  
縋。ら。扱。の。日。お。か。れ。る。の。あ。人。を。か。ら。と。早。尾。と。佐。倉。と。お。調。え。ま。う







多。早尾より争りぬるは、顔てうのぬ佐屋人等よりなぬどしてう。今日  
 彼而之強く人びして他兩人を入る守用ひの妙なりと云ふされ下とて、城一  
 佐屋よりとんと入るるとさう。守佐屋は、律宮内儀して却て、  
 のらとて、ゆを討せり。之を以て佐屋之甚尻大角。大竹千軒進と  
 云ふ人あり。津守とも入んと云ふも多々あり。進比宮移らせむひ  
 勢さむひなるゆへを出し、乘てある。助場飯田乃五家よりカセ流んと  
 ありふむひてら。口休く、其の成へて、其動静を察しひらる。次の日、津守  
 の衆流し諸士れ、船をゆき、其不意より、と云みり、久々。既、水無月  
 乃、衆目ふつて。今、手い、ま、ま、花、と、人、士、等、船、を、な、て  
 酒めり。又、吹、大、操、を、と、皆、を、採、漁、人、ら、も、船、を、う、み、て、よ、と、衆、を、成、り  
 くら、城、へ、大、橋、中、務、の、と、も、舟、を、と、採、林、を、城、内、に、む、え、ま、ま、と、と、前、日、より  
 内、庭、系、く、小、材、を、わ、け、り、及、ひ、う、か、ま、て、掃、ひ、流、ち、と、と、ふ、前、日、も、映、ふ、白、ひ、て







殺して失らるぞとげり口秋。最綱字依負け機をそとく守取と死せて  
 甚尻が垢城の遍で。諸大お後依して一膳よ余お也。早く土地の仕立  
 と出し捷を津清に秋ドらり。助勢をかき場と引とて逃れ  
 久の足より再びも成出さる。官の所在不いな月一奥旺し。重羽の  
 餘音けいそく音で甚尻らるるこつてな柏子お乃名とるり  
 も。久き世乃調つらん

古今奇談解野話第五之下巻 大尾

英州帝後編卷之五下

十八

古今 奇談

英草紙前編

全部五冊 先述る出来

明和三年丙戌年正月

江戸

通本町三丁目 西村 源六

大坂

心舟橋筋須慶町 南新町壹丁目

柏原清右衛門 菊屋惣兵衛



永昌堂板行書目拔書

五常訓

貝原先生著  
片力十全五冊

狂歌酒百首

曉月坊詠

律呂新書

宋蔡元定著  
楊齋先生校

同 增如集

由縁賦負柳添削  
栗柯亭木端詠

左氏傳系譜

古吳張我城輯

同 續增譜

栗柯亭選

康熙字典

翻刻

同 月夜鏡

右二同

吉斎漫錄

近刻

同 手札の鑑

右二同

孝經白文

山崎点 山崎源本  
かき付  
俗に云はれてゐる孝  
大家を示す

同 水北澁

山莫亭紫笛詠

孝經旁訓

古俗と新注との  
兩利を以て

同 難波津

一本亭芙蓉花詠

同國字解

全三冊

同 拾遺集

由縁賦送詠  
一本亭選

大成四書字引

古俗と新注との  
兩利を以て

同 千葉英

一本亭選

清詩選

全一冊

同 泥上詠

法眼竹田圓進詠

楷書千字文

無染和尚書

同 上苑書

負柳翁詠

行書千字文

文徵明石刻

同 狂歌

永田折因選  
附録程房漢方問答

歐陽詢千字文

片力十付

同 旭林

豊藏坊詠

書學大概

鳥石先生著  
平かな女

同 抄の志似

山中千丈詠

國姓爺傳

全二冊

同 千代松

芥川負佐選

通俗耆婆傳

全五冊

同 讀方

日々庵了山著

唐音和解

附録南京笛の譜

同 雅筵醉狂集

正親町公通卿御作  
狂哥の書也

閑卷一笑

小字別讀

同 負德狂歌集

一本亭輯

荊山集

得失論 學則  
律呂圖説

同 吾吟我集

石田未得詠  
一名狂哥集要

狂詩選

唐土の狂詩を集め  
和訓を附す

同 卜養狂歌集

全二冊

通俗千金寶

毛利貞齋先生記

同 堀川百首題狂歌集

全三冊

韻鏡問答鈔

本文之別を  
附録全四冊

同 銀葉夷哥集

全五冊

韻鏡翼

同 永源鈔

同 負德狂歌百首

全一冊



韻鏡諺解

小龜益英著 全六冊

丹堂遺稿

荒木忠庵著 神儒仙の大玄

衆方規矩

道三先生原本

妙藥集大全

岡本一抱子著 古今の學方先食療

見宜翁傳

松下見林著

閩書南產志

物産之書

喫茶養生記

榮西禪師作 茶の功能養生の秘法

樂燒秘囊

樂燒一切の仕操并 茶菓子持扱色を入

茶人花押叢

古今茶人の花押を 出各傳記を附記

茶席祖傳考

墨本を以て和漢 古傳の傳記を彙

雅遊漫錄

全七冊

青灣茶話

菓茶茶園茶

大上感應編

品々

同 諺註

同和解

丹 桂 籍

翻刻

慶 殃 錄

全一冊

合刻

陰陽錄 自知錄

袁了凡著 祿宏著

和字功過自知錄

全一冊

和語陰陽錄

全二冊

準提觀音靈驗記

功過和解入

五部九卷要文

二藏義略頌入 全一冊

改正けいこ和讃

報恩講勸のこゝろ入

御文章來意鈔

五帖目來由

法華けいこ要品

全一冊

ちんてき回答

増補改正 寸抄本

藤川五百首鈔 全二冊

松河日祭句 全一冊

改正三世相 全一冊 五外五文字付の古 教本

繪本鎧櫻 武者繪本全三冊

雜書大全いのはり 三世お入いのはり 七十六尺紙の古

攝州平野大繪圖 全一冊

浪花往古繪圖 全一冊 古代の事秘考 考の便と考

貝畫浦の錦 源成貞哥山貝及 諸国名貝評注

通俗節用類聚室 改正増字 日用重宝

英雄單談 帝教修羅の戦を 説け軍法三編寸

夢中一休 全四冊

古今英双紙 近乃行者著 千里浪子訂

古今鼓系野話 右二冊

投壺今格 全一冊

淨瑠璃秘曲抄 竹本播磨撰

懷室藥名付 某店の手帳也

八木虎の巻 高家の秘可

同 豹の巻 右同め

同 相場帳 言保以來米麦大豆 小豆金持米日の言十巻 清巻筒紙 高のかけ引を言ふ

日用高八卦

風雨天眼通 日和足板の書



以空上人方丈記

深草元政首書

墨色傳

墨色外似て万石の  
吉山を所存小宗

空洞書札集

采原為溪筆  
當用文章并因て

万福用文章室庫

當用書札手本  
重宝品々入

竹馬文章

長友本筆

古杖揃大全

全一冊

庭訓往来

御家流大字手本

素謡拍子笮

地拍子比考換を  
委考次全一冊

便用諷

記懐くてもあ  
るを集め詠とす

雜諷鞞笛鑑

為流拍子付卷  
笛鞞大鞞の透

秦曲笛譜

嵯峨の笛れ七

高家秘録

賣買の傳授

賣買出世車

米高古寶  
全三冊

高人萬年曆

曆を収て日高の  
吉山を所存万石の古

塵劫記傳授入

全一冊

算法節用集大全

全一冊

算法指南車

吉田光由原本  
安取竹弄子首書

珠算算学定位法

斜繩此法入  
永鏡の法入

懷算算指南

世小紅毛算と云  
甚便利なる術

同開平開立法

そろむんを用ひむ  
早く甚奥なる法

長者教

儉約肝要の書

日本永代藏

松蔭軒西橋本  
長者才菰也

御書物御經類古本賣買所

大坂心傳樓通傳所  
柏原屋佐兵衛